

【Advanced II】

筆記試験 <理論> 例題集 ③

(90分)

I. 次の楽譜を見て、各問に答えなさい。

The musical score is in B-flat major (two flats) and 4/4 time. It consists of three systems of music. The first system contains measures 1 through 5. The second system contains measures 6 and 7. The third system contains measures 8 and 9. Specific chords and measures are highlighted with boxes and labeled with circled numbers ① through ⑧. Roman numerals (ア), (イ), (ウ), and (エ) are placed above the notes in measures 4, 5, 6, and 7 respectively.

1. ①～⑧にあてはまるコード・ネームを書きなさい。テンションも記入すること。

- ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____
 ⑤ _____ ⑥ _____ ⑦ _____ ⑧ _____

2. **A**～**E**のコードの度数と機能を書きなさい。
 (注) 機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic → T Dominant → D Subdominant → S
 Subdominant Minor → Sm Secondary Dominant → Sec.D
 Sub Secondary Dominant → Sub Sec.D

	度数	機能
A		
B		
C		
D		
E		

3. (ア)～(エ)のコードに対する適切なアベイラブル・ノート・スケール名を書きなさい(開始音名も記入すること)。

(ア) _____ (イ) _____
 (ウ) _____ (エ) _____

●コード判別、コードの度数と機能、アベイラブル・ノート・スケールに関する問題です。Advanced IIでは、ノン・ダイアトニック・コード(代理コードやセカンダリー・ドミナント)を含めた各種のコードの判別と、コードに含まれるテンションの度数を答える必要があります。テンションの度数はコードのルートを基準に割り出すことができますが、それだけではなく、「そのコードに使用可能なテンション」であるかどうかを含めた、総合的な理解が望ましいところです。
 さらに、それらノン・ダイアトニック・コードの機能、コードの種別に対応したアベイラブル・ノート・スケール(ドミナント7thコードにおける複数のスケールを含む)についても把握しておきましょう。アベイラブル・ノート・スケールについては問題V.でもとり上げています。

- (正解) 1. ① Am7(^b5)(11) ② D7([#]9, ^b13) ③ Gm7(9,11) ④ C7(9,[#]11,13) ⑤ Fm7(9) ⑥ A^b7(9,13)
 ⑦ F7(13) ⑧ Bmaj7

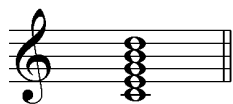
2.

	度数	機能
A	V7/IV	Sec.D
B	^b VII7	Sm
C	III _m 7	T
D	V7/II	Sec.D
E	^b II maj7	Sm

3. (ア)C リディアン・ドミナント・スケール (イ)F オルタード・(ドミナント・)スケール
 (ウ)G ハーモニック・マイナーP5↓スケール (エ)C ドリアン・スケール

II. 例にならって、次のコード・ネームの和音の基本形を書きなさい。

(例) Cmaj7⁽⁹⁾



Abm7⁽¹¹⁾ Bm7(b5)⁽¹¹⁾ A7(^b13/[#]9) Dbmaj7([#]11/^b9) Fmmaj7⁽⁹⁾

A musical staff with five empty boxes, each corresponding to one of the chord names listed above. The staff is in treble clef and is intended for the student to write the basic form of each chord.

●Advanced II では、テンションも含めたコードの構成音を問われます。ここでも、コードとテンション・ノートの関係についての理解が必要になります。

(正解)

Abm7⁽¹¹⁾ Bm7(b5)⁽¹¹⁾ A7(^b13/[#]9) Dbmaj7([#]11/^b9) Fmmaj7⁽⁹⁾

A musical staff in treble clef showing the correct chord voicings for the five chords listed above. The notes are: Abm7(11) (Ab, Bb, C, Eb, F, G), Bm7(b5)(11) (B, D, Eb, F, G), A7(b13/#9) (A, C, Eb, F, G), Dbmaj7(#11/b9) (Db, Eb, F, G, Ab), and Fmmaj7(9) (F, Ab, Bb, C, D).

Ⅲ. 次の曲を、1～2小節の例に続けて、3小節目以降をリハーモナイズしなさい。コードの数は必要に応じて増やしてもかまいません。

〈オリジナル〉

〈リハーモナイズ〉

●原曲のコードをリハーモナイズする問題では、メロディーに合い、曲の流れとしても自然なコード付けをすることが求められます。リハーモナイズは、元のコードの代理コードの使用、ドミナント・コードのトゥー・ファイブ等への分割、さらにセカンダリー・ドミナントの付加といった方法を使うのが一般的です。（これらについては、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』4章（61ページ～）で詳しく解説されています。）
 正解は一つではありませんので、いろいろな可能性を試みながら、メロディーとの相性に注意してまとめていきましょう。

(解答例) 〈リハーモナイズ〉

IV. 下の表は、ノン・ダイアトニック・コードの度数と機能について書かれたものです。例にならって表の空欄をうめなさい。

(注)機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic→T Dominant→D Subdominant→S
 Subdominant Minor→Sm Secondary Dominant→Sec.D

Key	度数	コード・ネーム	機能
例 C	^b II maj7	D ^b maj7	Sm
A ^b	^b VII7		
	^b VI7	C7	
F		A7	
A		Fmaj7	
	V7/II	G7	
D	^b VIImaj7		
	[#] IV _m 7(^b 5)	Am7(^b 5)	
G		F [#] 7	
D ^b	^b II7		
F [#]		B7	

●ノン・ダイアトニック・コードの機能についてのまとめです。各種の代理コードやセカンダリー・ドミナントについて、キーと度数の関係、およびその機能を網羅的に把握しておくことが必要です。これらに関しては『セオリー・オブ・ポップラー&ジャズ 2』第5章、特に代理コードの機能については30ページの表をしっかりと頭に入れておくと良いでしょう。

(正解)

Key	度数	コード・ネーム	機能
A ^b	^b VII7	G ^b 7	Sm
E	^b VI7	C7	Sm
F	V7/VI	A7	Sec.D
A	^b VI maj7	Fmaj7	Sm
B ^b	V7/II	G7	Sec.D
D	^b VII maj7	Cmaj7	S
E ^b	[#] IV _m 7(^b 5)	Am7(^b 5)	T (S)
G	V7/III	F [#] 7	Sec.D
D ^b	^b II7	D7	D
F [#]	IV7	B7	S

V. 例にならって、①～⑦のコードとメロディーに対応した、適切なアベイラブル・ノート・スケールとテンション・ノートの音名と度数を書きなさい。また、アボイド・ノートがある場合はアボイド・ノートの音名と度数も書きなさい。
(アボイド・ノートがない場合はNo Avoidと書きなさい。)

① Bm7(b5) ② Bb7 ③ Am7 Ab7 Gm7 ④ C7 Cm7 F7

⑤ Bbmaj7 Bbm6 Am7 D7 ⑥ G7 ⑦ Gm7 C7 (例) Fmaj7

●楽譜からアベイラブル・ノート・スケールを導き出し、五線にスケールを、またテンションとアボイドを音名と度数で書き出す問題です。Advanced II では、ノン・ダイアトニック・コードについても問われます。『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 3』第10章 (35~66ページ) の内容をよく整理して覚えておくことが大切です。

問題ではこれに基づいて、曲のキーに対する度数、さらにメロディーに含まれる音 (テンション・ノートとなり得る音) から、適切なアベイラブル・ノート・スケールおよびテンション、アボイドを判断します。特にドミナント7thコードの場合はメロディーをよく考慮して、最適なものを選択しましょう。

なお、③では、ダイアトニック・コードとしてフリジアン・スケールが基本ですが、変則的なケースとして^b2ndの代わりに9thを含むドリアン・スケールと考えても正解です (『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』40ページ)。

(正解)

(例) スケール: F イオニアン・スケール

Tension = G (9th)
Avoid = B^b (4th)

① スケール: B ロクリアン・スケール

Tension = E (11th) G^b (13th)
Avoid = C^b (2nd)

② スケール: B^b リディアン・ドミナント・スケール

Tension = C (9th) E (#11th) G (13th)
Avoid = No Avoid

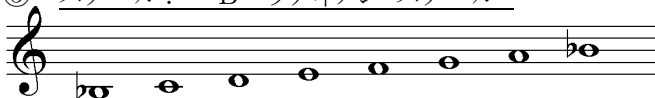
③ スケール: A フリジアン・スケール (※またはA ドリアン・スケール)

Tension = D (11th) (※B (9th))
Avoid = B^b (^b2nd) F (^b6th)
(※ドリアンの場合: Avoid = F[#] (6th))

④ スケール: C ミクソリディアン・スケール

Tension = D (9th) A (13th)
Avoid = F (4th)

⑤ スケール: B^b リディアン・スケール



Tension = C (9th) E (#11th)

Avoid = No Avoid

⑥ スケール: G リディアン・ドミナント・スケール



Tension = A (9th) C[#](#11th) E(13th)

Avoid = No Avoid

⑦ スケール: C オルタード・スケール



Tension = D^b(^b9th) E^b(#9th)

F[#](#11th) A^b(^b13th)

Avoid =No Avoid

VI. 次の曲に対し4 Way closeでVoicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。また、ベース音も書きなさい。

●メロディーに対するクローズ・ボイシングです。クローズ・ボイシングは、まずメロディーの音をトップとして、その下にコード・トーンを順に配置します。テンションを使用するには、各コードのアベイラブル・ノート・スケールを考慮して付加可能なテンション・ノートを見つけます。テンションを付加した場合はその直下のコード・トーンを省略します。（主として、ルートの代わりに9thを使用する場合があります。なお、*印以外の箇所でもテンションを付加するかどうかは任意です。）

ドミナント7thコードのテンションは、メロディーによっては9th、^b9th等複数の候補が使用可能です。この例のD7、E7ではいずれも使うことができますが、ここではD7の箇所（2、7小節目）でラスト・サウンド・アタックにより9th→^b9thと変化させた例を示しました。その他、この解答例に限らずさまざまな可能性があります。

以上のクローズ・ボイシングの手法については『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第1章（6～31ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章I～IV（8～25ページ）に整理されています。

(解答例)

VII. 次の曲に対し、4声～5声でOpen Voicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。

* Cmaj7 * Fm7 * B \flat 7 Em7 A7 Dm7 * G7 Cmaj7 Gm7 C7

Fmaj7 * B \flat 7 Am7 * D7 Dm7 * G7 C6

●メロディーに対するオープン・ボイスイングです。Advanced Iと同様、シンプル・オープン・ハーモニー、Drop2、Drop3、Drop2&4あるいはスプレッド・ボイスイング等の方法を適宜組み合わせてボイスイングします。Drop2やDrop3でできた新たな2nd、3rdボイスがテンションに変更可能であれば、テンションを使用することができます。ドミナント7thコードでのテンションの使い方はクローズ・ボイスイングと同様ですが、2ndや3rdボイスが5th音となった場合には13thまたは \flat 13thに変化させます。なお、1小節目の2拍目は、この解答例ではメロディーのC音との関係でmaj7thの代わりに6thを使っています。

以上、オープン・ボイスイングのさまざまな方法や注意点については、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第2章(32～48ページ)および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章V(26～32ページ)に整理されているので、譜面上でイメージできるように練習しておくといいでしょう。

(解答例)

Cmaj7 Fm7 B \flat 7 Em7 A7 Dm7 G7 Cmaj7 Gm7 C7

Fmaj7 B \flat 7 Am7 D7 Dm7 G7 C6